

V 考 察

1. 天王山式期の住居跡をめぐって

天王山式期の住居跡

従来、天王山式期の住居跡として、次の4遺跡が知られている。

新潟県村山市滝ノ前遺跡 ^{註1)}	3軒	1
福島県須賀川市弥六内遺跡 ^{註2)}	1軒	2
福島県国見町仏供田遺跡 ^{註3)}	1軒	3
岩手県水沢市常盤広町遺跡 ^{註4)}	1軒	4

以下、各住居跡について概説する。

滝ノ前遺跡

滝ノ前遺跡は三面川が日本海に注ぎ出る河口の右岸段丘に形成され、遺跡は、その段丘先端部に南面し、標高は42mである。景勝、軍防、山海の利等の自然条件に恵まれた地域である。遺跡は県道の付帯工事によって発見され、緊急調査によって3棟の住居跡が発見された。

(1号住居)

1/3程が残存する円形プラン竪穴住居で、直径5m前後と推定される。壁はロームを30cm程切り込んで作られ、周溝がある。柱穴は径35cmのものが中央寄りに3個検出された。

(2号住居)

プランは、ほぼ正円形で径5.65m～5.50mで周溝幅は30cm前後、深さ平均10cm、中央東寄りに地床炉が検出された。周溝中には径15cmの浅いピットが配列されている。柱穴は径約30cm前後のものが不規則ながら南北線に略3列にならんでいる。

(3号住居)

プランは径5.35m～5.15mのほぼ正円形で、周溝が全周する。周溝幅は30～35cmで幅広く、深さも20cm以上に及ぶものがある。住居跡北側に1.3m×1mの方形の張出し部がつく。柱穴は、径25cm前後、深さ30～40cmでほぼ3列に配列されている。周溝中には、ほぼ対角の位置に4個の柱穴が認められる。炉は確認されなかった。

2号住居、3号住居はともに、ローム面を切り込んで壁を作り出す竪穴住居ではなく、ローム面を幅広の周溝で囲み住居を区画した。いわゆる平地式住居に属する。

住居の堆積土中からは、須恵器、土師器（和泉式）、弥生終末期の千種式等がわずかに出土し、出土量の90%は弥生式土器である。その大部分が天王山式土器で、少量の畿内系の土器が伴う。1号住居のピット、3号住居の周溝や床面から天王山式土器が出土していることからして、

住居跡は3例共に天王山式期に属することが確認された。

弥六内遺跡

須賀川市史に記録がある。報告者によると、隅丸方形の竪穴が検出され、天王山式土器が発見された事により、天王山期の住居跡とされたが、第3者の談話によると、出土土器そのものは、天王山式土器と見なし得るが、竪穴住居跡との関連は明確に把握されていないともいう。

仏供田遺跡

遺跡は、信達盆地北端部の低地洪積平野に立地している。遺構は、圃場整備事業に先立ち、同地区一帯に遺存する条里制遺構調査の際発見された竪穴住居跡1棟である。

住居跡は長径3.25m、短径2.85mの不整円形プランで、壁の立ち上りは4～10cmと低く、住居跡埋土は単層である。埋土中から土器片30数片とフレイク1点が出土した。土器は、いずれも天王山式土器である。

常盤広町遺跡

遺跡は、北上川西岸の洪積平野に立地し、河流からわずか1km距っているにすぎない。

伊東信雄氏によって調査が行われ、竪穴1棟が検出された。竪穴は、東西3.2m、南北2.5mの隅丸長方形のプランで、地山に40～45cm切り込んで作られている。

床面は堅く、壁の直下に幅10cm、深さ15cmの周溝が巡る。炉、柱穴は見られない。

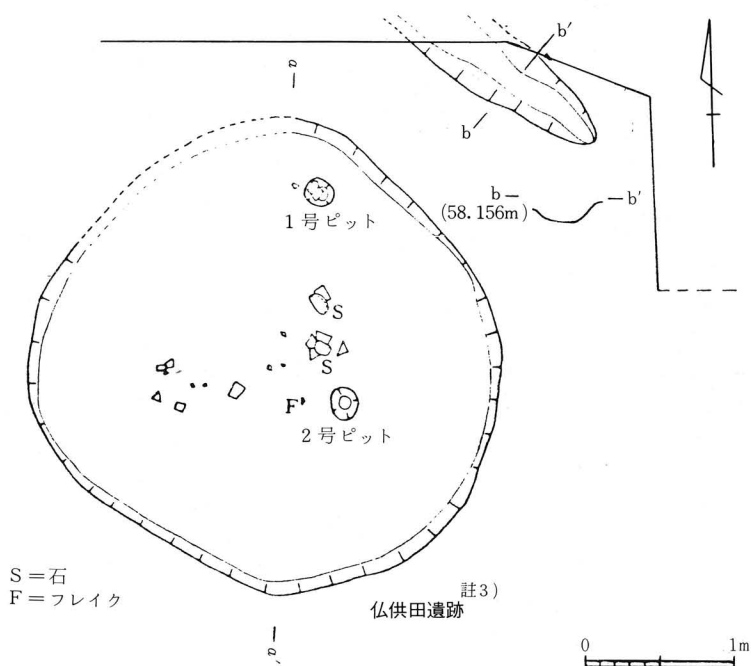
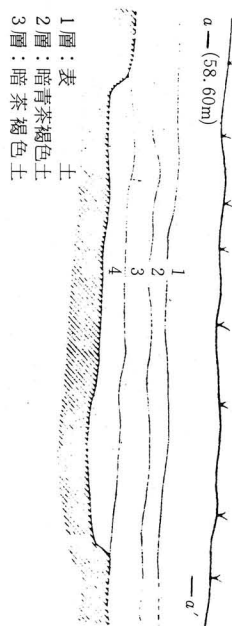
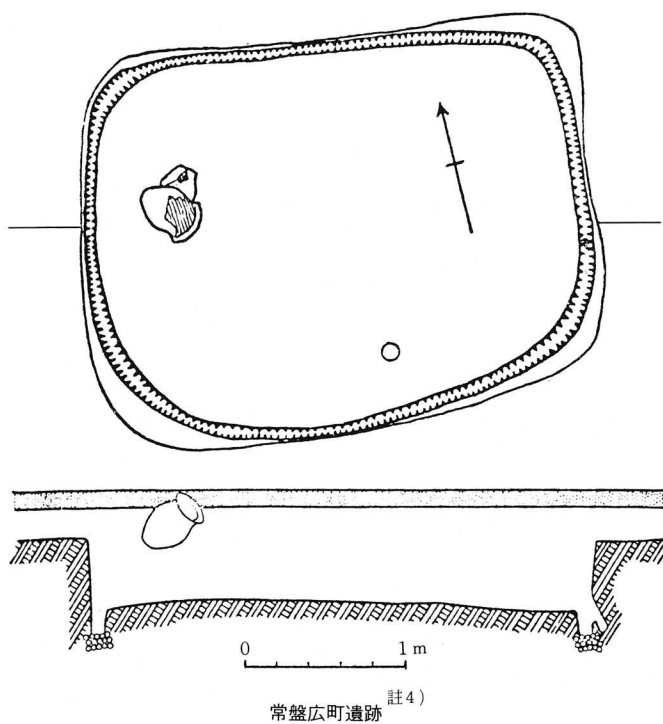
遺物はいずれも床面から浮いて出土した。出土遺物には、多量の土器、鏃17点、細形管玉25点、ガラス製小玉2点がある。土器は、ほぼ完形を有するものが4個発見され、うち2個は、合口の状態で出土し、他の一点には底部穿孔が認められる。伊東氏は、これも合口壺棺の片割れではなかったかと推定されている。

以上のように、出土遺物及び出土状態から推して、本例は極めて墓壇的性格が強いと考えられる。私は、合口の状態で出土したと推定される土器が、いずれも竪穴上面に浮いている河原石群の上部に存在したという点を重視し、竪穴は当初、住居として構築され、後廃されて墓地に転用された際、この河原石群が置かれたものと解したい。それは北海道の縄文～続縄文時代の、墓壇に見られるように、墓壇底にベニガラをふりまく、或いは墓壇上に集石を配する事等と同じ意味をもつ禁忌的性格のものであろうと推測している。

天王山式期の既知の住居跡について概述した。一応ここで整理してみると、

㊦ 住居の構築は、住居構築面を掘り凹めて区画する竪穴式住居と、周囲に周溝を巡らして住居空間を区画する平地式住居の両者がある。後者は、滝ノ前遺跡の2例のみで、他はいずれも竪穴式住居である。

周溝は滝ノ前の3例と、常盤広町例に認められる。



第26図 天王山式期の竪穴住居跡例

⑥ 住居のプラン 滝ノ前遺跡の3棟、仏供田例が円形プラン、常盤広町、弥六内例は長方形又は隅丸方形プランである。滝ノ前例は、天王山式期の複数の住居跡が発見された唯一の例であるが、発見された3棟がいずれもほぼ正円形を呈している事は、それが仮に滝ノ前遺跡、或いは、新潟北部にのみ特有な特徴かは知らないが、或る種の傾向として把握することはできよう。

⑦ 柱穴及び炉 滝ノ前3例には、明瞭な柱穴が存在するが、常盤広町、仏供田例には遺存しない。炉は、滝ノ前2号住居に地床炉が認められる。他は不明もしくは認められない。尚、ここで藤田氏の記述により、天王山遺跡の炉と思われる遺構についてふれておく。^{註5)}

「山頂南端部から0.9m×1.0mの略円形規模で16個の河原石が巡り、石囲の中は最深27cmの灰層であった。これより東0.8mの地点では、径0.7mの範囲に灰層があり、その上に焼けた白河石が集積された個所があり、集石下部にも薄く灰層が残っていた……………」

以上の藤田氏の記述及び略図から、前者は石囲炉、後者は集積炉であろうと想定される。藤田氏による天王山遺跡の第1期発掘調査は、1地点が1m或いは2m四方といった試掘程度の発掘であった為、本来、竖穴あるいは平地式の住居跡であったものを確認できなかったのではないと思われる。

第3表 東北地方の弥生時代住居跡一覧

遺 跡	時 期	平面プラン	大きさ (m)	面積 ^{m²}	柱 穴	周 溝	炉	そ の 他
山形・地藏池	棚 倉	円形か	4～5	約15.5	10数個 周囲にめぐる	な し	不 明	平地式か
福島・伊勢林前2号	棚 倉	略円形		12.5	ほぼ円形に 6 個	な し	地床炉(東側)	平地式
岩手・長谷洞	梶形町	不整円形	3.1×3.3	7.2	竖穴の外周に 17 個	な し	石囲炉(円形)	
宮城・十三塚	桜 井	不整円形?						
岩手・常盤広町	天王山	隅丸長方形	3.2×2.5	8	な し	あ り	な し	床面に朱
宮城・上ノ原A	天王山	馬蹄形	4.2×4.0	約16	床面3、壁面2	な し	地床炉	良好な炭化木材
福島・仏供田	天王山	不整円形	3.2×2.8	約7	な し	な し	な し	
〃・弥六内	天王山?	隅丸方形						
新潟・滝ノ前1号	天王山	円 形	4.2(+a)	17以上	3 (+a)	あ り	不 明	
〃 〃 2号	天王山	円 形	5.5×5.6	約23.4	多数 (略3列 にならぶ)	あ り (幅30cm)	地床炉	平地式
〃 〃 3号	天王山	円 形	5.3×5.1	約20.9	多数 (同上)	あ り (幅30cm)	な し	平地式、張り出し部あり
福島・伊勢林前26号	磐船山	不整方形	(3.0×3.0)	(9)	不 明	な し	不 明	
〃・大畑G 1号	磐船山	隅丸方形	4.0×3.4	13.6	主柱6、支柱2		地床炉(礎1)	
〃・〃 2号	磐船山	隅丸長方形	4.4×2.7	11.9	2 (+a)			
〃・輪 山 1号	磐船山	隅丸長方形	5.0×3.8	19			な し	地床炉3
〃・〃 2号	磐船山	隅丸長方形	5.0×2.2	11			な し	な し
〃・〃 3号	磐船山	不整方形	3.3×3.3	11				な し

(天王山式期のみ新潟県まで含めた。)(出典は54ページ文献を参照の事)

東日本の弥生後期住居跡

和島氏によれば「関東地方の住居プランは、久ヶ原期→弥生町期→前野町期とわたる発展の過程に応じて、小判形、胴張隅丸方形からさらに隅丸方形への変遷を大勢とする」と指摘されている。^{註6)}縄文時代の竪穴住居は円形プランを呈するものが圧倒的に多く、古墳前期になると、方形又は隅丸方形にプランが画一化されていく事は周知の事である。関東地方では、弥生中期前半の須和田式期に既に方形化の傾向がうかがえる。宮ノ台式期になると、例えば千葉県市原市大蔵遺跡では、宮ノ台式期の竪穴住居36軒の内、1軒のみ円形プランで、他はすべて方形プランを基調とする（楕円形、隅丸方形を含む）。しかも、方形プランの例がいずれも、壁溝、柱穴、炉、貯蔵穴等によって構成される。柱穴はほぼ対角線上の4か所に穿たれるのに対し、前者は規模も小さく、壁溝、貯蔵穴も認められず、ピットはあるが、柱穴とは認められない等、後者に比べて著しく見おとりがする。^{註7)}

又、北関東の茨城県大洗町長峯遺跡では、磐船山式、十王台式期の住居跡17軒が発掘され、内、円形プランは1軒のみで、他はいずれも方形を基調とする。一般的な内部構造は、ほぼ対角線上に4個の支柱穴を配し、竪穴中央部に地床炉を有するタイプで、稀に壁柱穴を伴う例、貯蔵穴、周溝を伴う例がある。^{註8)}

以上の具体例及び他の諸遺跡の知見から、少なくとも、関東地方では、弥生中期以降、竪穴住居の平面形が円形プランを主体とする集落の存在は確認されていない。中部地方でも、後期初頭には、関東地方と同様の傾向を示している。^{註9)}

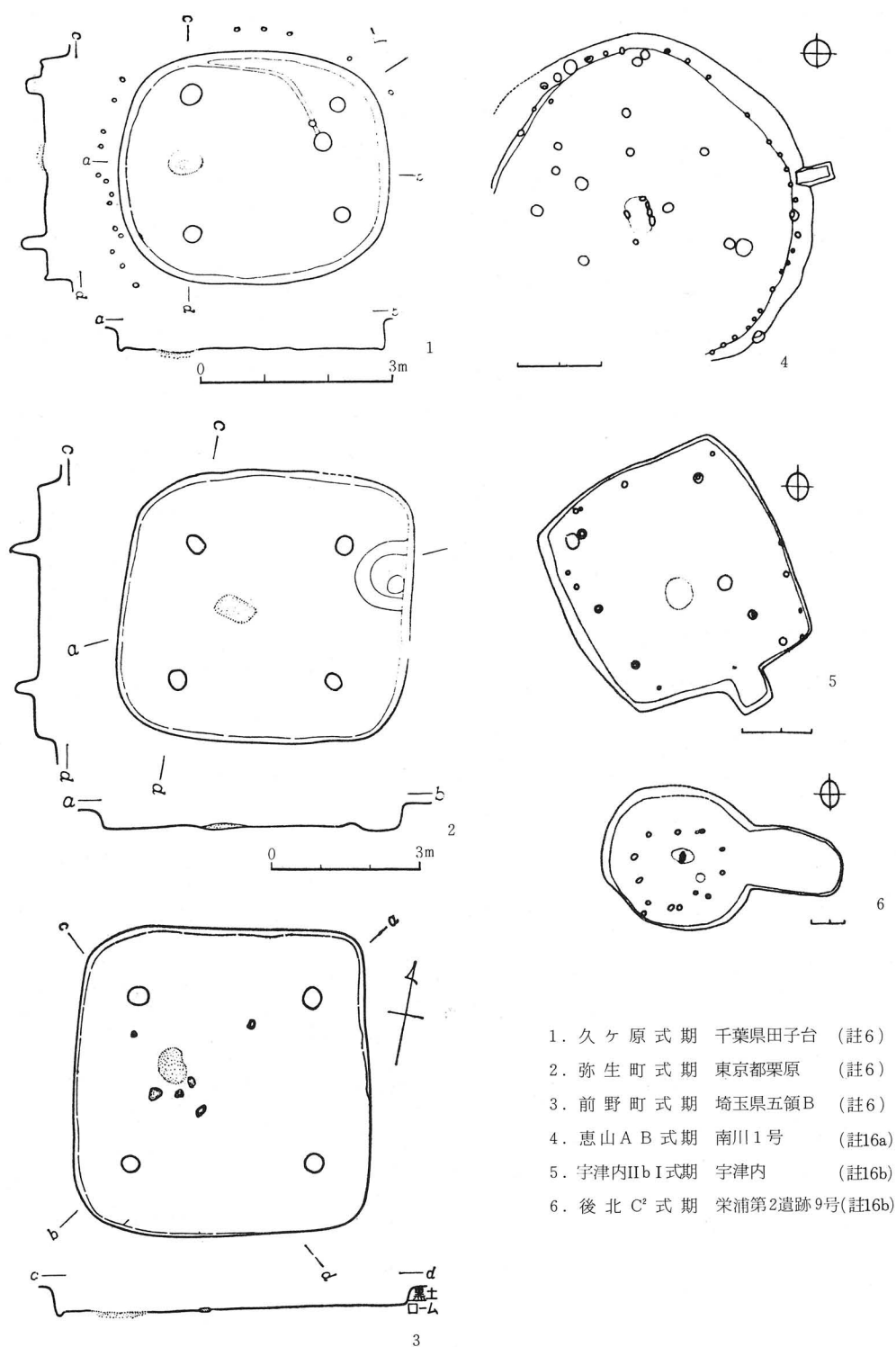
次に天王山式期を除く東北地方の弥生式期の住居跡についてふれておく。従来、該期住居跡も具体例が乏しく、類型化を試みることは困難であるが、最近の2、3の発見例を加えて概述する。

山形県天童市地蔵池例は、周壁が認められず、径4～5mの円形に十数個のピットが巡り、中央に炉が認められた。^{註10)}棚倉式期。

岩手県大船渡市長洞見塚例は3.1×3.3mの不整円を呈する竪穴住居で、円形の石囲炉が認められ、竪穴の外周に17個のピットが巡っている。時期は楸形囲式期である。^{註11)}

福島県いわき市伊勢林前遺跡2号住居は、平地式の略円形で、6個の柱穴を配し、地床炉を持つ。同26号住居は3×3mの不整方形を呈する竪穴住居である。前者は中期中葉、後者は中期後半に属する。^{註12)}

福島県いわき市輪山遺跡から、3棟の竪穴住居跡が発見されている。1号住居跡は隅丸長方形で長径5m、短径3.8m、壁の立ち上りは4～11cmと浅い。ほぼ対角線上に支柱穴4個があり、壁の立上り部に十数個の小ピットが認められ、地床炉が3か所に認められた。2号住居跡



第27図 関東地方の弥生後期と北海道縄文時代の竪穴住居

は、長径5m、短径2.2mの細長い隅丸長方形を呈する。主柱穴、炉は認められず、壁の立上り部に壁柱穴と考えられる小ピットが多数認められた。3号住居跡は、長径3.3m、短径3.28mの隅丸長方形を呈し、炉、主柱穴と目されるものは確認されない。壁の立上り部、及び外周に多数註13)の小ピットが巡っている。以上3棟はいずれも後期前半の磐船山式期に属する。

他にいわき市大畑貝塚註14)、名取市十三塚註15)がある。

北海道の続縄文時代住居跡

北海道の続縄文文化と本州の弥生式文化とは、多分に異質的要素を含み、両文化の住居跡を同列に比較検討することは必ずしも適当ではないが、従来、天王山式文化が多分に北海道的要素を具備するといわれて来たことを考え合わせる時、必ずしも無意味ではないと思われる。

北海道においても、続縄文時代住居跡の発掘例は極めて乏しい。例えば、瀬棚南川遺跡では、墓壇21基に対し、住居跡2棟が発見されている（墓壇は2時期に亘る）。北海道続縄文時代は、大きく恵山期、後北（江別）期、北大期に区分できる。そのうち、北大期の住居跡は、現在知られていない。

まず、縄文晩期終末の例から概述する。永川遺跡例は8.7m×6.3mの楕円形を呈する竪穴住居跡で、炉北側や壁沿いに柱穴が並ぶ。栄浦第2遺跡13号竪穴は、7.4m×6.5mの隅丸長方形を呈し、前者と同じく壁沿いに小柱穴が並ぶ。一方の壁に、長さ8m、幅1.5mの舌状の張り出し部がつく。両例共、地床炉を有する。

恵山期の住居跡は、川尻で1軒、絵鞆で4軒、南川で2軒等が知られている。いずれも8m～9mの大型の竪穴住居で、石囲炉を持ち、壁沿いに小柱穴を有する点で共通している。ここで南川遺跡第1号住居跡について概述する。大きさは、8.36mの略円形プランを呈し、東壁部に幅45cm、長さ90cmの長方形の張り出し部がつく。壁の立上りは緩やかで、壁高は50～30cm。住居跡中央に、約70×60cmの方形の石囲炉がある。柱穴と思われるピットは計43個で、主柱穴は、いずれも深さ30cm以上の5個が当てられ、壁沿い及び壁部には径10～20cm、深さ10～20cmの小ピットが30～40cmの間隔で認められた。

後北期の住居跡は、前半期では、岐阜第2遺跡10号、15号住居のように、8mの楕円形、円形プランを呈するものと、宇津内遺跡のように、後北A～BC期にかけての竪穴住居跡すべてが方形プランで、壁側面に舌状の張り出し部を有する点で共通した特徴を有する、2タイプが認められる。

宇津内遺跡に特徴的な、舌状の張り出し部は、通路又は出入口と見られ、前述の永川遺跡、後続するC²式期に属する栄浦第2遺跡9号竪穴に見られ、北海道東部の地域的特徴と見られている。

開生遺跡20号住居、栄浦第2遺跡9号竪穴は、共に円形プランを呈する竪穴住居で、後北C²

式期に属する。

以上を要約すれば、北海道縄文時代住居跡は、7 m 前後の大型の竪穴住居で、竪穴のほぼ中央に石囲炉又は地床炉を持ち、壁柱穴を有するものが多い事があげられる。竪穴のプランは、一応円形プランを主流とし、道東部に方形プランで舌状の張り出し部をもつタイプが存在する。尚、この場合、本州の方形プランの竪穴に一般的な、対角線上に4個の支柱穴を有するものは見られないようであり、その系譜は不明である。^{註16)}

北海道の縄文時代と東北地方の弥生時代との横の関係は、現時点では必ずしも明確ではないが、例えば南川遺跡1、2号住居跡は、ともに中村氏の言う恵山A、B期に属し、東北の弥生式編年の中期後半に位置づける事は可能である。一方、後北式期後半の位置は弥生末期から古墳時代^{註17)}にまたがる時期と考えると大過ないであろう。^{註18)}

以上東日本の弥生式時代住居跡の傾向について概述した。住居の構築方法は、地面を数十cm掘り凹めて住居を区画する竪穴住居が大勢を占め、東北地方中期前半、北陸地方の後期前半(天王山式期)に平地式住居が僅かに見られる。

住居プランは関東地方では和島氏の指摘の通り、楕円形から隅丸方形への変遷をたどることができる。平面プランの方形化は、大庭遺跡例で明らかのように、既に宮ノ台期にほぼ確立されているといっても過言ではない。更には縄文晩期にまでさかのぼって円形プランの住居跡を主体とする集落は例外的にしか存在しない。

西日本では関東地方等と異なり、弥生後期まで円形プランの竪穴を主体とする集落が存在する。また、静岡県登呂遺跡では床の周囲に低い土手を巡らして囲い、その内部を住居空間とする平地式住居が知られている。

東北地方の弥生時代住居跡は、北海道の「円」基調と、関東、中部地方の「方」基調との中間地帯にあって、複雑な姿相を呈している。中期中葉まで「円」基調であったものが、後期に入ると円形プランと方形プランが相半ばしている。これを形式別にみると、磐船山期ではいずれも方形又は長方形で占められ、天王山式期では、円形4、方形2、馬蹄形1とバラエティに富む。両者の際立った住居プランの相違は、前者が北関東にその本拠を置く文化であるのに対して、後者が北海道と関連を持つ東北土着の文化であることを思えば、おのずと説明がつく。また、縄文末期の亀ヶ岡文化期の住居跡が、いずれも円形プランであることも興味深い。

註

1. 新潟県村上市教育委員会：「滝ノ前遺跡」『新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急調査概報』1972
2. 『須賀川市史』1970
3. 福島県教育委員会：『伊達西部条里遺構発掘調査報告Ⅰ 福島県文化財調査報告書第59集』1977
4. 伊東信雄：「第四章 弥生文化」『水沢市史Ⅰ』 水沢市史刊行会 1973
5. 藤田定市：「天王山遺跡の調査報告」1951
6. 和島誠一、田中義昭：「住居と集落」『日本の考古学Ⅲ、弥生時代』河出書房 1966
7. 『市原市大庭遺跡』房総考古資料刊行会 1974
8. 『茨城県大洗町長峯遺跡』大洗町教育委員会 1973
9. 石野博信：「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探究家』社会思想社 1974
10. 赤塚長一郎：「最上川中流部の初期弥生文化—天童市成生、地藏池遺跡にみる文化層を中心に—」『山形県の考古と歴史』柏倉亮吉教授還暦記念会 1967
11. 『岩手県大船渡市長谷洞貝塚』 岩手県教育委員会 1972
12. 『伊勢林前遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書 第1冊、福島県いわき市教育委員会 1972
13. 『輪山遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書 第4冊、福島県いわき市教育委員会 1977
14. 「原始、古代、中世資料」『いわき市史』第8巻 いわき市 1976 同書によると、磐船山式期の
竪穴住居跡2棟が発掘されている。平面プランは、1号が隅丸方形、2号が隅丸長方形である。
15. 不整円形プランに近いという。名取市教育委員会より報告書が近日中発行されると聞いている。
16. 北海道の続縄文時代の住居跡については、下記文献を参考とした。
 - a 『瀬棚南川遺跡』瀬棚町教育委員会 1976
 - b 宇田川洋：『北海道の考古学 2』 1977
 - c 山崎博信：「雄武開生遺跡20号」『北海道考古学』第1輯 北海道考古学会 1965
17. 中村五郎：「北海道南部の続縄文土器編年」『北海道考古学』第9輯 北海道考古学会 1973
18. 佐藤信行：「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』 1976